

祝島集落の練塀修復プロジェクトの軌跡

——集落研究から練塀修復，そして集落保全へ——

橋部好明*・河村満生**・森保洋之***・池田亜依****・木本 渉*****

(平成19年10月31日受理)

On the Traces of the Restoration Project of the NERIHEI-wall in IWAISHIMA-Village

——From the Study on the Village to the Preservation of the Village——

Yoshiaki HASHIBE, Mitsuo KAWAMURA, Hiroshi MORIYASU,
Ai IKEDA and Wataru KIMOTO

(Received Oct. 31, 2007)

Abstract

The aim of this report is to describe the traces of the restoration project of the NERIHEI-wall in IWAISHIMA-village.

The main contents are as follows: 1. the summary of the study on IWAISHIMA-village. (From the study on the village to the restoration project of the NERIHEI-wall.) 2. the traces of the restoration project of the NERIHEI-wall. (From the restoration project of the NERIHEI-wall to the preservation of the village.) 3. the expansion to the preservation of the village.

The restoration project of the NERIHEI-wall has played an important part in the preservation of the village.

Key Words: Iwaishima village, restoration project, NERIHEI-wall, a study on village, a preservation of village

1. 本報告の目的

山口県上関町南西部に位置する離島である祝島集落は農・漁業併存集落である(図1)。祝島集落は、自然環境や風土に順応し、地域に合った祝島独自の集住のカタチを形成している。比較的平坦な北斜面に住宅が集中して集落形成がなされており、集落のいたるところには「練塀(ねりへい)」と呼ばれる祝島集落特有の構造物がある(写真1)。長年に亘り集落を守り続けてきた練塀は、風雨や老化によ

り、ひび割れや空洞化、そして表面の漆喰のはがれ、崩れ易い状態などが見受けられるようになってきた。練塀のこうした状態を知り、住民の有志が意識を持ち始め、祝島集落の伝統とも言える「練塀」を修復保全していこうと計画した。それが「練塀修復プロジェクト」である。練塀への意識を深めてもらうことを主目的として、2007年1月21日に祝島集落で開催された「練塀フォーラム」が、練塀修復(保全)の始動宣言的なものとなった。ここでは、祝島集落の練塀修復(保全)の軌跡を報告したい。なお、本集

* 山口県上関町教育委員会・委員長

** 山口県上関町教育委員会・次長

*** 広島工業大学環境学部地域環境学科

**** 広島工業大学大学院環境学研究科地域環境科学専攻(現在ランドブレイン(株)福岡事務所)

***** 広島工業大学環境学部環境デザイン学科

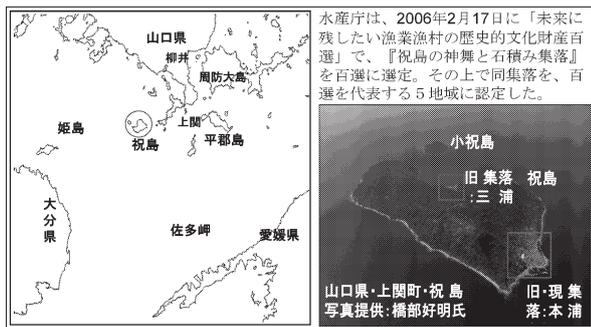


図1 祝島の位置

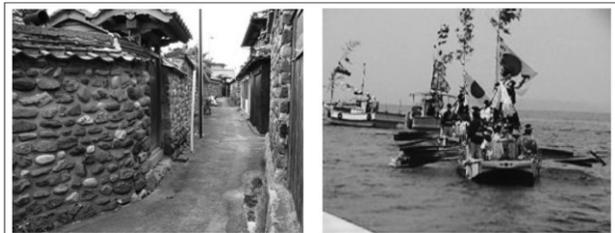


写真1 祝島集落の2つの特徴（練塀(左)と神舞(右)）

落は、高度経済成長期から、人口が流出して減少し、高齢化が進む過疎地域で、現在は人口減少に伴い空家が目立つ状態になっている。

2. 祝島集落研究の今までの成果

ここでは、今までの祝島集落研究の成果のうち、本報告に関連する内容について要約的に示す。なお、祝島集落研究は、広島工業大学森保研究室、および山口県上関町の住民有志を中心に6年に亘り協働的に行ってきたものである。

2-1. 本道（ほんみち）

「本道」とは、集落の主要な古くからの道のことである。この道は、昔から冠婚葬祭の際に通ることが決められている主要なもので、集落内を行き来するために縦横に張り巡らされているものである。また、本道に直接繋がる道のうち、本道と同じように使われている道があり、それを「準本道」とし、本道と同等に扱うこととした。

2-2. 練塀（ねりへい）と路居（ろきよ）

「練塀」とは、集落を形成する祝島独特の構造物（塀、場合により壁）である。練塀の構成は、石を二列に並べ、その間に土を入れ、それを塀の高さ、または、軒の高さまで積み上げたものである。塀（壁）の道側の石の周りの土の部分には、漆喰を施し、強固なものとしている。厚さが50cmにも及ぶ練塀は、強い風雨や火災から家屋を守ることを主目的にしている。練塀のタイプは、これまでの研究から、様々なタイプが見い出されている(図2)。現在、祝島集落内では、約500戸のうち、およそ半数近くの家に、練塀が残っているものとみられている。

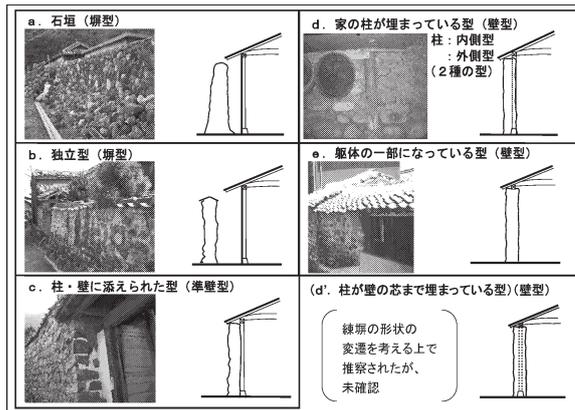


図2 祝島における練塀の各タイプ

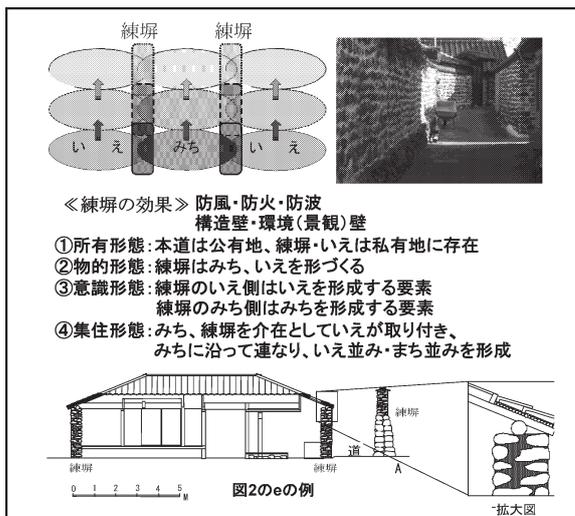


図3 路居の概念図と断面図（いえ，道，練塀）

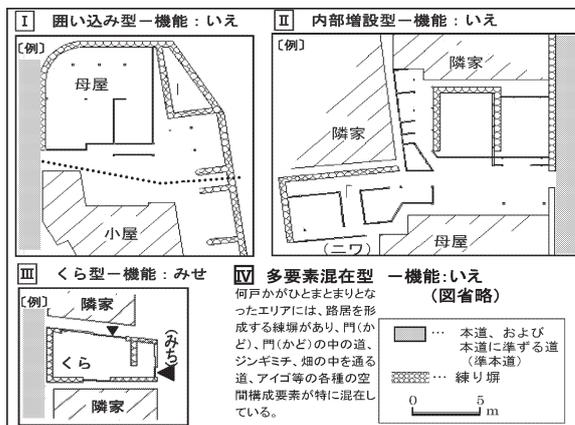


図4 路居に従属する型 - 4種

本集落では、道に練塀が取り付け、それらが道に沿って連なり、家並みを、ひいては町並みを形成している。この祝島集落の集居の形式を、散居、集居などの集居の密度を示すものに対して、集居の形態（形式）を示すものとして、研究上では、「路居（ろきよ）」と命名した(図3)。(祝島住民は、最近、練塀修復作業を通して、何時しか、これを「練塀通り」と呼んでいる。)

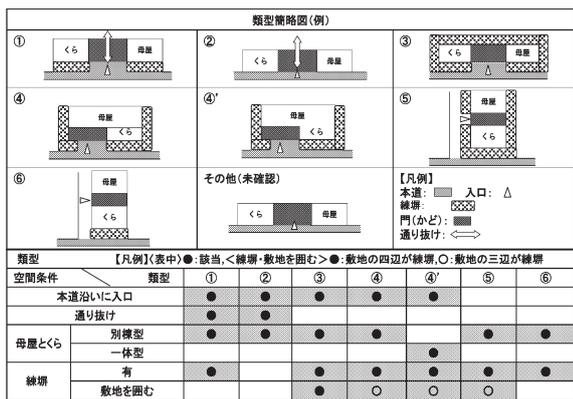


図5 本道に取り付く家（住宅）の型 ー 7種

2-3. 路居に従属する型

敷地面積の中規模程度の事例の場合、「路居に従属する型」として、1. 囲い込み型、2. 内部増設型、3. くら型、4. 多要素混在型の4種が見い出された(図4)。また、「本道に取り付く家の型」として、特に敷地が小規模で、練塀が主として塀型・準塀型である家の型、7種が確認されている。(図5)

3. 祝島集落の練塀修復の実態

ここでは、「練塀修復プロジェクト」に基づき実施された「練塀フォーラム」および「練塀修復」の実態について示す。前章に示す「祝島集落に関する研究」が、「本集落の練塀修復」の原動力の一つになったものと位置づけている。

3-1. 経緯

祝島を訪れる人は、練塀を見に来る人が多い。今までの森保研究室の集落研究によると、国内で類似の練塀集落は他に無く、四国、九州にも練塀は何箇所か点在しているが、祝島のように家並み・町並みを形成していない。他所には無いこの練塀は、塀としての機能だけではなく、塀を壁にも併用する建築的手法となっている。集落の調査や視察案内を行う中で、練塀の傷んだ箇所が目にとまり、気になってきた。特に、持ち主不在の空家の練塀は急速に傷む。人口減少が著しく進んでいる祝島にはとても辛いことである。農林水産大臣の表彰で「石積み集落を大切に守れ」という言葉を頂き、守らなければという思いが、練塀修復プロジェクトの構想の基本となった。練塀を修復するには、人員や、材料、道具が必要であり、それにかかる資金も必要である。修復への第一歩は、T建設自然・歴史環境基金に資金援助の申請書を提出することから始まった。そして、資金援助が認められ、2006年11月から翌年10月末までに作業を終了する期間制限が示された。修復作業を開始するまでの日程、作業内容は、表1の通りである。

3-2. 状況・成果

既掲の通り、2007年1月21日に「練塀フォーラム」が開

表1 申請書提出から練塀修復作業開始までの作業日程

作業日程	作業内容
2006年 7月20日	「公益信託 T建設自然・歴史環境基金」に資金援助の申請書を提出
10月29日	上記申請書が認定される
11月22日	事前作業
12月 1日	自治会役員会用説明資料作成印刷
12月27日	島内周知用文書（回覧）作成印刷
2007年 1月 3日	フォーラムポスター作成印刷
1月 5日	フォーラム開催の協力要請
	町役場、教育委員会訪問（交通費）
1月 9日	フォーラム横断幕作成
	フォーラム参加者受付簿
1月18・20日	会場準備
1月21日	「練塀フォーラム」開催 講師弁当
	代 講師謝礼
1月24日	左官道具の買出し（交通費）
1月26日	左官道具搬入
2月1・2日	材料搬入



写真2 練塀フォーラムと練塀修復予定箇所の説明（右下）



写真3 練塀修復作業の様子

催された(写真2)。ここで、過去約6年におよぶ当集落研究の成果が、参加者に披露された。そして、「練塀修復プロジェクト」は、2007年2月2日に実質的に開始され、その様子は、新聞・他に数多く取り上げられた。祝島集落の伝統・文化を保全するための最初の練塀修復は、特に練塀が多く残る地区の中央にある善徳寺の裏通りを対象に始まっ

た。修復方法・手順は、先ず、石の間の古い漆喰やモルタルを取り除き、新たにモルタルを石の間に詰め、渇くまで待ち、最後に漆喰を塗って仕上げた。真っ白になった練塀に日がさし、辺りを明るくするという効果が感じられた。練塀に対する祝島住民の意識の変化、そして更に、練塀保全に対して前向きに、島の伝統・文化を守ろうとする皆の思いが一つになった瞬間でもあった。しかし、具体的には、慣れない作業だけに予定より時間を要したことも多々あり、漆喰を塗る前の下塗り面の下地の点検で手直しが必要となった日も少なくなかった(写真3)。

2月と3月の練塀修復作業については、表2、表3に示すとおりである。4月までの修復にかけて、祝島住民はもちろんのこと、取材に来られた記者やスタッフの方々、また、島外から観光に来られた方々の協力もあり、善徳寺周辺や鐘堂前、照満寺周辺、光明寺などの練塀が、順次、修復されていった。多くの方々のご協力のおかげで、作業はハイピッチで進行したのである。その結果、写真4の練塀の修復前と修復後の比較を見て分かるように、修復前・後では明らかな違いがあり、修復後の練塀は真っ白で道を明るく感じさせている。練塀修復プロジェクト開始の2月から、この時点までの約2ヶ月間で、まだまだ多くの修復箇所は残っているものの、本道に取付く特に主要な練塀修復は終了した。4月から8月までは、都合により、ほとんど練塀修復作業はされておらず、9月に入ってから急ピッチで作業が行われ、再び着々と作業が進んだ(表4)。

9月末までの練塀修復作業の全体結果・成果として、延べ距離約300m、高さ平均1.5m、面積約450㎡が修復された。島民を中心に、参加ボランティア約300人の参加による成果である。漆喰は、合計して約2トンを使用した。全体を通して、一人が一日かけて練塀を修復する範囲(作業量)については、おおよそ平均で、幅約1m、高さ1.5mであった。また、一日の作業時間としては、ボランティアは9時に作業を開始し、15～16時まで行い、島民有志は少し長く、8時前に修復準備から始まり、修復を終えて片づけを行うため、17時半を過ぎるという状況であった。予想を超えるボランティア参加のおかげで、当初に予定されていた面積を、3～4倍とはるかに超えた修復実績を得ることができた。

また、既掲の表2～表4、および図6に示す通り、修復した場所として、善徳寺(浄土真宗)、照満寺(浄土真宗)や光明寺(浄土真宗)などの、寺やその近辺の修復の多いことが分かる。その中で、特に、善徳寺やその周辺に、結果的に重点が置かれた。この度の練塀の修復した型は、図2の、「b. 独立型(塀型)」, 「e. 躯体の一部になっている型(壁型)」などが主であった。(図6の注記: 参考文献1の図5の図中の現在・過去の練塀の位置を参照された

表2 2月の練塀修復作業日程と内容

修復作業日程	作業内容
2007年 2月 2日	修復作業(氏本邸)
2月 3日	修復作業(山崎邸)
2月 4日	修復作業(氏本邸)
2月 7日	修復作業(石原邸)
2月10日	修復作業(氏本邸)
2月11日	修復作業(山崎邸)
2月16日	材料搬入
2月20・21日	修復作業(善徳寺)
2月23日	材料道具運搬
2月24日	修復作業(光明寺)
2月25日	修復作業(善徳寺)
2月26日	修復作業(照満寺)
2月28日	修復作業(石原邸)

表3 3月の練塀修復作業日程と内容

修復作業日程	作業内容
2007年 3月 2日	修復作業(小川邸・氏本邸)
3月 3日	修復作業(善徳寺)
3月 4日	修復作業(小川邸・氏本邸)
3月 6日	修復作業(山戸邸)
3月17日	修復作業(山戸邸)
3月18日	修復作業(氏本邸・山戸邸)
3月19・20日	修復作業(氏本邸)
3月21日	修復作業(山戸邸)
3月22・25日	道具類格納

表4 9月の練塀修復作業日程と内容

修復作業日程	作業内容
2007年9月6～8日	修復作業(善徳寺)
9月11～13・15～17日	修復作業(山根邸) //
9月19～22・24日	修復作業(竹中邸)
9月29・30日	道具類格納

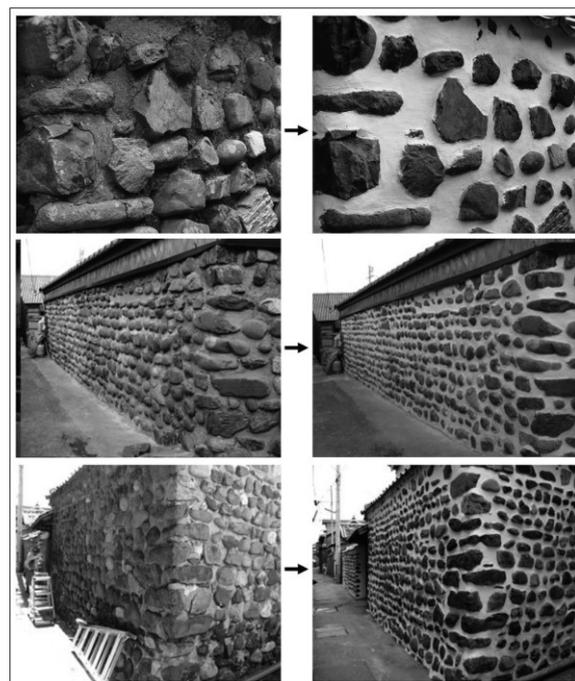


写真4 練塀の修復前(左側)と修復後(右側)の比較

い。)

練塀という空間構成要素の修復（保全）である「練塀修復プロジェクト」を通して、多くの方々が祝島を訪れることになり、周辺地域から祝島集落の練塀に対する価値観が芽生えたものと推察される。新しく練塀に塗られた漆喰は色落ちなく白く輝いており、集落景観を維持し続けて行くものと確信している。

3-3. 資金

3-1に示す通り、祝島集落の「練塀修復プロジェクト」を実行するには、材料や作業道具購入などの資金が必要であった。資金の提供を求め、本プロジェクトを推し進める為、本事業を、山口県の県民活動団体として登録されたボランティア団体である「祝島ネット21」の事業と位置づけ、既掲のとおり、「公益信託T建設自然・歴史環境基金」に応募申請を行った。この基金はT建設株が、国内外の自然環境の保全に関する事業及び歴史的建造物等の保存に関する事業に対し助成金を交付するものである。T建設の基金の目的としては、「現在および将来の人類共通の財産である自然環境や歴史的建造物等の保護に役立つ事業に助成し、これらを次代に継承することによって人類の健康で文化的生活の確保を資すること」とある。

つまり、練塀修復のため、漆喰や修復用の道具（へらや脚立、漆喰を受ける器、ほか）の購入、更に人件費などの資金確保のための助成金を要請することになった。

具体的には、2006年11月からの、1年間の事業として、事業予算100万円で、自己資金20万円、会員、その他からの寄付10万円として、70万円の助成申請を行った。その結果、今回のプロジェクトでは60万円がT建設の基金から認められ、不足分は、経費削減等により工夫することになった。材料は減らせない故に、人件費での削減を考慮し、ホ

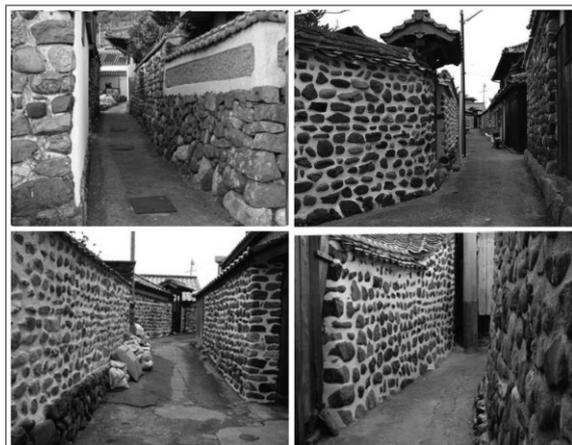


写真5 練塀修復後の路居（練塀通り）風景

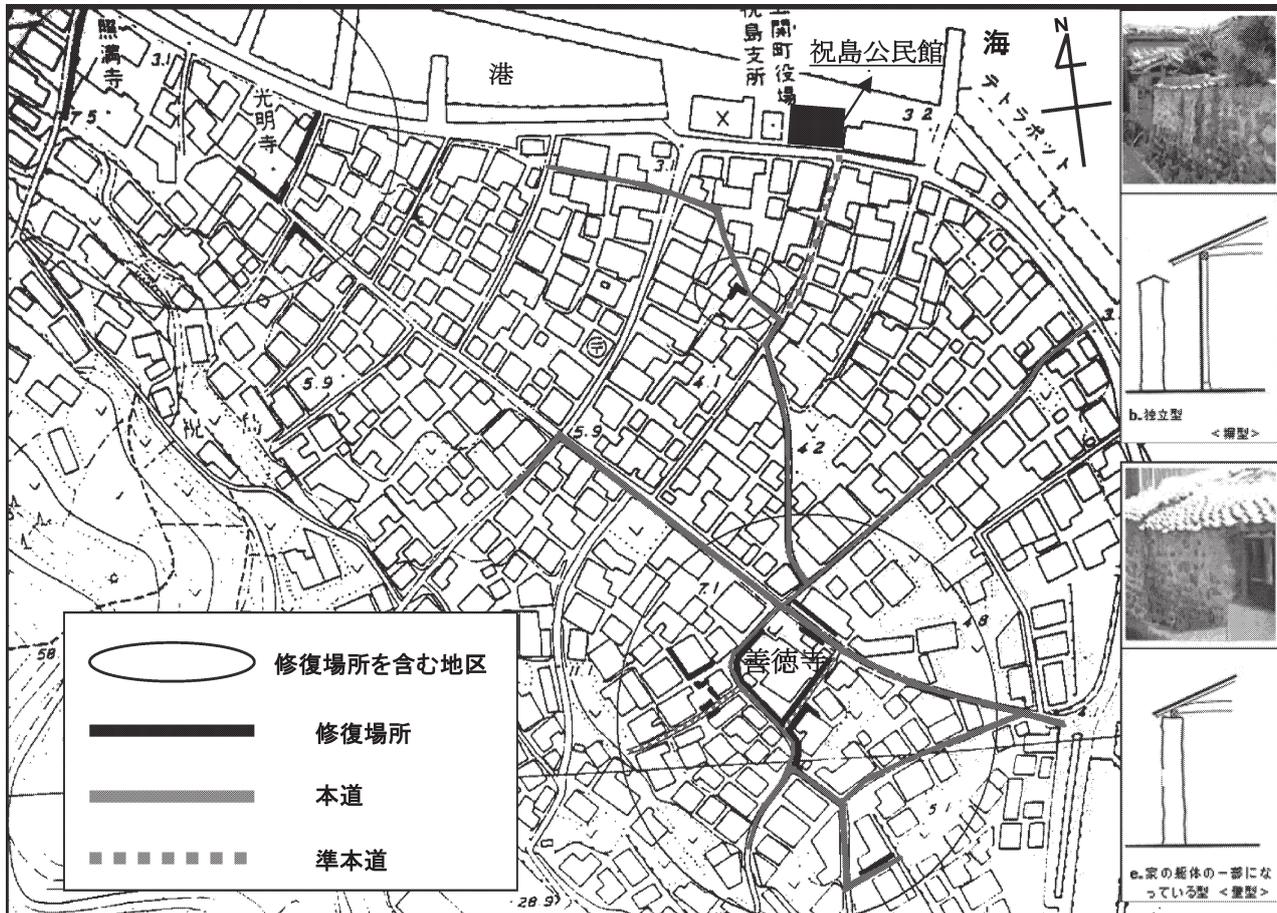


図6 練塀の修復範囲

ランティアの協力を頼らざるを得なくなった。そして、漆喰や、道具等を購入しながら、何回かに分けて修復作業を行ったのである。

3-4. 評価・効果

練堀修復後、祝島の住民に練堀に対しての意識調査（アンケート）を行ったところ、修復前は殆ど、一般の通りとしての意識しかなく、練堀に対しての意識が極めて少なかった。しかし、修復を終えてからの意識は変わり、多くの方々が、練堀が白くなったことによって「練堀の通り（練堀通り）」としての意識を持つようになった（写真5）。また、練堀修復を行い、その保全に対して意識されるようになり、後継ぎ（若い人）につなげて行ってほしいという意見まで頂いた。「練堀修復プロジェクト」が行われたことにより、島内だけでなく、島外から来られた方々にも修復作業を通じて、「文化的建造物への関心」や、「練堀集落の特徴を知ること」、等々の意識が増大し、結果的に、島の活性化に繋がるものと推測された。つまり、修復作業をとおして、祝島独特の集落景観への意識やその保全についても皆が前向きに捉え、集落を「後継ぎ」に託したいという気持ちが共有化したものと考えられる。

更に、練堀修復後、住民に修復後の練堀、あるいは「路居」に関する意識調査（インタビュー）を実施したところ、練堀はきれいになり、傷などが修復前ほど目立たなくなったとの回答を持つ方が多かった。本道などの比較的多く利用される通りにおいて、以前より明るくなったという意見も頂いた。これは、練堀が白くなり、住民の「通り」に対する意識が変わったものとして理解することができる。また、昔は家に練堀があったが、今は敷地面積の確保の意味で練堀を取り壊した住民から話を伺うと、「昔のように直せるなら修復したい」との意見があり、現在は練堀を持たない住民にも、祝島独特の景観堀（壁）への再認識があったものと推測することができる。これらの意識は、「練堀」を見直し、次世代に練堀集落の伝統を継承するための、大いなる力になるものと考えられる。

4. 今後の展開—練堀修復から集落保全へ—

「練堀修復プロジェクト」は、やり始めたら2.3箇所では済まなくなる。練堀集落は日本国内の他所にはない貴重なもの故に、練堀の修復・保全の価値は十分にあると考える。これからは、予算や人手などの問題もあるが、修復作業を続行していく予定である。T建設の基金は2006年11月か

ら1年間の事業なので、それ以降は費用が用意でき次第、修復作業を実施するというカタチになるだろう。そのときは、おそらく、本道沿いの練堀を中心に順次、更に修復し、今まで以上に、冠婚葬祭で使用される主要な道（本道）になって欲しいと願っている。今後は、少しずつの修復作業となるが、時間をかけて広範囲に亘る修復作業を行いたい。しかし、練堀修復完了が終点ではない。「練堀修復」から先にあるものは「集落保全」である。「練堀修復」、「路居の形成の保全」、「共用空間の形成の保全」、そして更に、集落は一つの大きな屋敷であるとされる「祝島集落全体の保全」というシナリオである。ともあれ、練堀修復を基に、皆が協力して、景観堀（壁）ともいえる構造堀（壁）を守ることが、今後への確実な一歩と考えている。

謝 辞

「公益信託 T建設自然・歴史環境基金」、および、集落住民、並びに修復作業に携わって下さった全ての方々のご協力のお陰で、ここまで修復作業が行えたことに、心から感謝申し上げます。これからも練堀修復作業を継続し、練堀を保全し、ひいては集落を保全し、次世代に集落の今後を繋げられるよう努めていく所存であります。温かい見守り、ご支援を、切にお願い申し上げます次第であります。

参 考 文 献

1. 池田亜依, 正渡智章, 三浦佑也, 森保洋之; 祝島集落の空間構成に関する研究, 広島工業大学紀要 研究編第41巻, pp.233~240(2007)
2. 池田亜依, 森保洋之; 祝島集落の空間構成に関する研究—空間構成要素の枠組みの考察—, 日本建築学会住宅系研究論文報告会論文集1 pp.185~194(2006)
3. 池田亜依, 森保洋之; 祝島集落の空間構成に関する研究—空間構成要素からみた枠組み—, 日本建築学会シンポジウム(第18回都市形成・計画史公開研究会)居住地のアイデアの形成/居住地の計画・形成の原形 pp.59~60(2006)
4. 森保洋之, 星出直也; 祝島における集住空間の構成要素に関する研究, 日本建築学会計画系論文集 第585号, pp.9~16(2004)
5. 橋部好明氏ホームページ; 祝島フォト情報
6. ホームページ祝島ネット; 祝島ネット21会報, 祝島通信第18号~20号(2006~2007)